

「赤井と氷野」
「往古の水上交通の拠点」

前回紹介した「極門建設記念碑」から東へ200メートルほど進むと、右手に老人ホームが、左手に水路の跡が見えてきます。この辺りは太子田地区と赤井地区の境界にあたり、かつては切前きりまへという小字名こあざなで呼ばれていました。

「切前」という地名は、江戸時代に付近の堤が切れて水害が発生したことに由来するといわれています。明治21年（1888）に町村制が施行されると、この地に大東市の前身である南郷村の役場が置かれました。役場があった場所は、先ほどの老人ホームの立っている辺りでした。明治23〜37年には、役場の隣に南郷尋常小学校（現在の南郷小学校）の校舎も置かれました。

さて、ここからは赤井地区に入りま



昭和38年頃の氷野の淵
（現・氷野ポンプ場付近）

す。赤井は、江戸時代前期の万治元年（1658）に赤井村が成立するまで氷野村の一部でした。南北に接する赤井と氷野は、かつて「赤江」という地名で呼ばれていました。

平安時代前期に編まれた「類聚るいご国史」によると、赤江は御厨みくりやといわれる皇室領に属し、地元で獲れた魚貝類などを献上していました。また、室町時代に摂津・河内地域に拠点を置いていた土豪・水走みずはや氏の記録には、「氷野河ひのかわ浮津」という船着場の名前が登場することから、赤井や氷野の辺りが、当時大東市域に広がっていた深野池ふかのいけの水上交通の拠点だったことが分かります。

赤井と氷野には、18世紀初めに深野池が新田開発された後も、濁ぶちが残っており、昭和48年（1973）に淵が埋め立てられるまで寝屋川との間を小舟が行き交う水郷地域でした。

赤井地区に入ると、古堤街道は道幅が次第に狭くなり左右に蛇行するようになります。東に400メートルほど行くと、北野神社と泉勝寺が見えてきます。今回はこの2つの神社について紹介します。（生涯学習課）